

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22590455

研究課題名(和文) 生体肝移植ドナーの心理的問題についてのインタビュー調査

研究課題名(英文) A interview study on the psychological issues of living liver donors

研究代表者

藤田 みさお (Fujita, Misao)

京都大学・iPS細胞研究所・准教授

研究者番号：50396701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：Paterson BLら(2001)の“Meta-study of qualitative health research: a practical guide to meta-analysis and meta-synthesis”を参考に、生体肝移植ドナーの心理・社会的問題を扱った質的研究をレビュー・分析した。その結果、「意思決定と何か」「自発的同意とは何か」「術前の心理・社会的負担とは何か」「術後の心理・社会的負担とは何か」「レシピエントとの良好な関係とは何か」について明確化して研究する必要性を指摘することができた。当該テーマと関連の深い「渡航医療」「再生医療」についても成果を発表した。

研究成果の概要(英文)：Based upon Paterson BL, et al.(2001)'Meta-study of qualitative health research: a practical guide to meta-analysis and meta-synthesis,' we reviewed and analyzed qualitative studies on the psycho-social issues of living liver donors. Accordingly, we pointed out the importance of clarifying several concepts before starting a study such as decision-making, voluntary consent, pre- and post-operational psycho-social burdens, and good relationship with a recipient. We also published papers of relevant issues such as medical tourism and regenerative medicine.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学 医療社会学

キーワード：生体臓器移植 ドナー 術後 質的研究 心理社会的問題

1. 研究開始当初の背景

健康なドナーの身体にメスを入れる生体肝移植において、最優先されるべきはドナーの身体的・心理的安全の確保である。しかし90年代後半より、肝左葉から容量の多い肝右葉を摘出する症例が増え、ドナーに対する術後の身体的負担が増大していることが問題視されるようになり、国内外で実際に死亡例が報告されるようになった。

こうした報告を受け、個別性の高いドナーの体験やニーズの具体的な詳細を把握するには、インタビューの逐語録など言語データを用いた質的研究を行う必要があると指摘されてきた。だが、さまざまな方法論的立場に基づく質的研究の成果はときに矛盾し、結局、何が明らかになったのか(またはなっていないのか) 必ずしも明確ではない。

2. 研究の目的

そこで本研究では、質的研究の成果の体系的な統合手法として注目されつつある、Paterson BL, et al. “Meta-study of qualitative health research: a practical guide to meta-analysis and meta-synthesis” 参考にしながら、生体肝移植ドナーの心理・社会的問題を扱った質的研究の分析・統合(メタスタディ)を試みた。具体的には、1) 術前における心理・社会的問題はどのように報告されているのか、2) 術後における心理・社会的問題はどのように報告されているのかという問いのもとに、レビューを行い、今後の課題を指摘する。

3. 研究の方法

医学系文献データベース PubMed を用いて文献検索を行った(検索用語: “Living Donors” [Majr] AND “Liver Transplantation” [Majr] AND ((qualitative AND (study OR research)) OR interview))。検索の結果得られた英語文献 33 件のタイトルと抄録を読んだうえで、生体ドナーの医学的側面や量的研究のみに焦点を当てたもの、ドナーを対象としていない調査を除外、入手可能な文献 20 件を分析対象とした入手した文献は、Paterson BL, et al.による「一次研究評価ツール」を参考にしながらまとめた。

4. 研究成果

分析の結果、今後さらに明確化することが必要な研究課題として、「意思決定と何か」「自発的同意とは何か」「術前の心理・社会的負担とは何か」「術後の心理・社会的負担とは何か」「レシピエントとの良好な関係とは何か」といった問題が抽出された。

1) 術前における心理・社会的問題はどのよ

うに報告されているのか

<意思決定とは何か>

肝臓移植が必要な疾患では、脳死者からの提供が得られず、生体ドナーが見つからなければ、患者、つまりは大切な家族の救命が望めない。ここに、透析という代替治療が存在する腎臓移植とは異なる、生体肝移植特有の差し迫った状況が生じうる。そのため、先行研究の中でも、肝臓提供するかしないかを決めるドナーの意思決定を取り上げたものが数多く見受けられた。ただし、そのほとんどは「意思決定」という現象に関する明確な定義を示していないため、情報のないまま直観的に提供を決めた時点を「意思決定」と捉えて概念化した研究もあれば、その後の揺れ動く心理を「意思決定」として概念化した研究もあり、数多くの研究成果から何がいえるのが理解することを難しくしている。今後は、「意思決定」ということばの定義を明らかにしたうえで研究を実施していくことが課題であろう。

<自発的同意とは何か>

生体臓器移植においては、移植に伴う利益と危険性について十分に説明を受け、周囲からの強制がない状態で、ドナーが臓器提供に自発的に同意していることが不可欠である。だが、先行研究から示唆されるのは、理性的で合理的な人間が個人の選好に照らして自由な意思にもとづき提供同意すること指して、「自発的」と呼ぶことの限界であった。感情的な判断にもとづく咄嗟の決断や、不安や葛藤の中で悩んだ末の決断であっても、「自発的」と見なせるものは存在することがドナーの語りからは伺われた。ただし、医療従事者としてドナーの同意確認作業を行う際に重要であり、かつ困難なのは、感情的になったり、不安や葛藤したりしながら行うドナーの意思決定のなかで、自発的なものとそうでないものとを識別することであろう。今後は、この二つを厳密に識別できるような概念モデルの構築が待たれる。

<心理・社会的負担とは何か>

移植という選択肢について聞き、提供意思を固めてから手術に至るまでのプロセスは、心身のスタミナや忍耐力、持久力、決断力が要求される過酷な経験である。そのため、ドナーが経験するさまざまな心理・社会的負担や対処法について明らかにする研究が数多く報告されていた。だが、先行研究の結果からは、ドナーの語りによってその「心理・社会的負担」を明らかにすることの方法論的な限界が示唆された。不安や懸念について明示的に語られれば、それが「心理・社会的負担」なのか? 身体症状として暗示的に語られれば、それも「心理・社会的負担」といえるのか? まったく語られない場合は、「心理・社会的負担」を回避していることになるのか?

それとも、それ自体存在しないとみなしてよいのか？ 今後は意識化されない潜在的な不安を測定できるような投映法等を用いた調査が課題であろう。

2) 術後における心理・社会的問題はどのように報告されているのか

<心理・社会的負担とは何か>

術後のインタビューでは、医療従事者による介入の余地がある、より具体的な問題が語られており、なかでも、Forsberg et al.が「健康から病への移行」と呼んだ概念「健康な状態で眠りについたが起きたら重症であり激しい痛みが生じているという、ドナーの主観的経験」は特筆に値する。突然、健康を失う経験をしたにもかかわらず、医療従事者からは患者ではなく、健康人として扱われることに、ドナーはさみしさや自信喪失、無視されている、といった感情を抱いていた。Crowley-Matoka et al.も「非患者としてのドナー」という概念で同様の指摘を行った。それまで自明であった健康を突如として失い、ドナーとして払う犠牲の大きさを最も実感するのが術後である。こうした喪失体験や、退院して社会復帰するまでの経験を説明する概念は、ドナーに対するサポートに示唆を与えるものとして重要であろう。

<レシピエントとの良好な関係とは何か>

ドナーからの臓器提供は、肝臓の一部、そして結果として生命を贈答する行為にあたり、その後、レシピエントとの関係がどのように変化したのか（あるいはしなかったのか）は、術後における心理・社会的問題のなかでも、大きな関心が寄せられているテーマのひとつであった。ただし、術後のドナーとレシピエントとの関係性の変化といっても、さまざまな変数（例えば、親子、兄弟、夫婦、その他といったそもそもの関係や、親密であったか疎遠であったかといった術前の関係性、ドナーが独立して生家とは別にすでに家庭を持っているか等）に影響されることが想定される。生体肝移植におけるドナーとレシピエントの関係は非常に個別性が高く、一般的な傾向を明らかにすることは困難だが、今後はこうした変数にも配慮した研究結果の整理も求められるだろう。

3) 限界と意義

文献レビューを複数の研究者で実施していれば、より多角的な分析や幅広い研究成果の統合が行われていた可能性がある。また、生体移植全般における文献や日本語文献の検索を実施していれば、より網羅的なレビューが行われていた可能性もある。しかし、質的研究の成果の体系的な統合手法として注目されつつある、Paterson BL, et al. “Meta-study of qualitative health research: a practical guide to

meta-analysis and meta-synthesis”を参考にしながら、1) 術前における心理・社会的問題はどのように報告されているのか、2) 術後における心理・社会的問題はどのように報告されているのかという問いを立て、「意思決定と何か」「自発的同意とは何か」「術前の心理・社会的負担とは何か」「術後の心理・社会的負担とは何か」「レシピエントとの良好な関係とは何か」といった問題の明確化が今後の研究課題であることを指摘した点で、本研究は一定の意義があるものと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計10件)

- Fujita M, Matsui K, Monden M, Akabayashi A. Attitudes of medical professionals and transplant facilities toward living donor liver transplantation in Japan. *Transplantation Proceedings* 2010; 42: 1453-9. (査読有)
- Fujita M, Slingsby BT, Akabayashi A. Transplant tourism from Japan. *American Journal of Bioethics* 2010; 10(2): 24-6. (査読有)
- 中田亜希子, 藤田みさお, 児玉聡, 大屋博道, 水野能文, 赤林朗. 医薬情報担当者(MR)の継続教育における倫理教育に関する現状調査. *医薬品情報学* 2010; 12: 61-68. (査読有)
- 藤田みさお, 赤林朗. 日本における幹細胞治療の現状と問題. *日本医事新報* 2011; 4562: 27-31. (査読無)
- 藤田みさお. 倫理的側面からみた糖尿病看護の実践と研究. 倫理的側面から見た糖尿病看護の実践. *日本糖尿病教育・看護学会誌* 2011; 15: 81-83. (査読無)
- 藤田みさお. 脳画像を用いた研究における偶発的所見の取り扱いに対する研究者の見解と施設の実態. In: 赤林朗編. 『脳科学研究と倫理 資料集(2010年度)』. 46-61. 東京大学; 2011. (査読無)
- 藤田みさお. 近況報告: 私の研究. *M-GTA研究会 News letter* 2011; 56: 52. (査読無)
- 藤田みさお. 生命・医療倫理の基礎. *心身医学* 2012; 52: 1117-1123. (査読無)
- 藤田みさお, 赤林朗. 臨床における倫理問題への取り組み. *日本内科学会* 2012; 101: 2059-2064. (査読有)
- Takahashi S, Fujita M, Fujimoto A, Fujiwara T, Yano T, Tsutsumi O, Taketani Y, Akabayashi A. The decision-making process for the fate of frozen embryos by Japanese infertile women: a qualitative study. *BMC Medical Ethics* 2012; 13: 9. (査

読有)

〔学会発表〕(計4件)

- 藤田みさお . 日本における生体肝移植ドナーの適応範囲に関する調査 . 第 22 回日本生命倫理学会年次大会 . 豊明 : 2010 年 11 月 .
- 藤田みさお . シンポジウム・倫理的側面から見た糖尿病看護の実践と研究 . 医療における研究倫理と臨床倫理 . 第 15 回日本糖尿病教育・看護学学術集会 . 東京 : 2010 年 10 月 .
- 藤田みさお . 心身医学講習会 , 生命・医療倫理学の基礎 . 第 52 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会 . 横浜 : 2011 年 6 月 .
- Akabayashi A, Fujita M. The present and future of stem cell therapy in Japan. Uehiro Carnegie Oxford Conference 2012, Life: its nature, value and meaning. Tokyo, Japan: May, 2012.

〔図書〕(計1件)

- 藤田みさお (訳). 「喪失のトラウマ」. In : George Fink 編 . ストレス百科事典 翻訳刊行委員会訳 . 『ストレス百科事典』 , 1812-1815 . 丸善 ; 2010 .

6 . 研究組織

(1)研究代表者

藤田みさお (FUJITA, Misao)

東京大学大学院医学系研究科 医療倫理学分野 助教 (平成 25 年 4 月まで)

京都大学 iPS 細胞研究所 上層倫理研究部門 特定准教授 (平成 25 年 5 月より)

研究者番号 : 50396701